

Ⅱ

障害者の在宅就業を活用した 新たな職域に関する調査

4. 岐阜県における「働く」障害者の好事例

(1) 県内事業所における在宅就労事例の紹介

(1) 県内事業所における在宅就労事例の紹介

これまで、県内における在宅就労に関する状況把握のための調査は、平成10年度の事業スタート時と、平成18年より3年間、独立行政法人高齢・障害者雇用支援機構における「在宅就業支援団体における就職支援推進事業」を受託・実施する中で2度行ってきた。

それにより、県内には重度の障害者が「在宅」という形態で働いている企業が6社（含む、受傷後の復帰というケース2社）あることが判明し、以後、訪問並びに機関誌等の発送を通し、情報提供並びに啓発・広報に努めている。

残念ながら、今回の調査では、何故か一社からの回答しか得られなかった。しかし、これまで当法人が企業等との間に名立ち関わりをもった「在宅」における「就労／雇用」の事例は一名／一例ではあるが、その企業の障害者の就労に対する理解と積極的な受け入れ姿勢に加え、取り組みと管理システムにおいて大変参考になると思われるので、厚生労働省による「在宅就業支援団体における就職支援推進事業」の検討委員会委員として参加した時、取材等に関わりをもった独立行政法人高齢・障害者雇用支援機構による「障害者の在宅雇用事例集」～就職支援ノウハウを活用して～より、同機構の掲載許可のもとに紹介する。

※ 「在宅就業支援団体における就職支援推進事業」における

「障害者の在宅雇用事例集」

～就職支援ノウハウを活用して～

作製：独立行政法人 高齢・障害者雇用支援機構

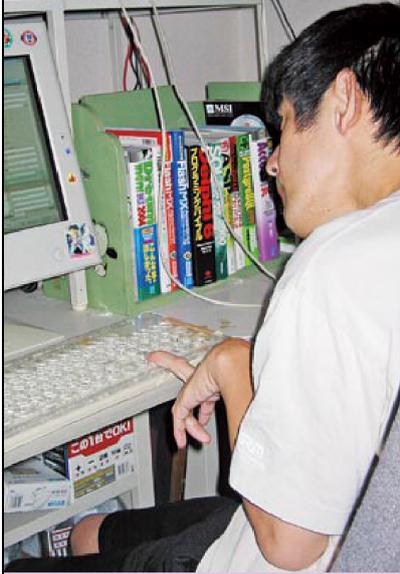
〒105-0022 東京都港区海岸 1-11-1

ニューピア竹芝ノースタワー

http://www.jeed.or.jp/activity/education/download/zaitaku_jirei_03.pdf

在宅雇用
事例 3

支援団体が対象者の経歴を十分に把握。 再就職の際も本人の資質を活かした在宅雇用を可能に。



在宅雇用の経緯

脳性まひにより上下肢に障害のある末永慎一さんは、専門学校で習得したパソコンのスキルを生かし、平成元年に関西のソフト開発会社に就職。在宅雇用でプログラム開発を担当し、打ち合わせの際は単身来社、ホテルに宿泊して出社するなど積極的に仕事をこなしてきました。私生活では結婚、子どもにも恵まれ仕事への意欲も増してきたものの、平成14年にリストラにより退職。その間、自らが立ち上げたホームページを売り込み就職活動をする一方で、学生の頃より交流のあった在宅就業支援団体「バーチャルメディア工房ぎふ」に相談しました。

折良く、支援団体のサポートにより3カ月間の請負業務をこなした後、平成15年に支援団体から推薦され、デジタルコンテンツ（WEB、DVD等）制作、システム開発を行うサンメッセ株式会社マルチメディア部に就職しました。

同企業が完全にバリアフリーではないこと、スキルのにも在宅雇用が可能ことから、業務連絡はメールで行い、進捗管理は電子日報を活用しています。現在は、比較的開発に時間を要するシステムのプログラム開発に携わり、意欲的に仕事に向き合っています。

Profile

支援団体 特定非営利活動法人 バーチャルメディア工房ぎふ

- 所在地：岐阜県大垣市加賀野 4-1-7
- ☎ 0584(77)0533 FAX 0584(77)0533
- URL：http://www.vm-studio.jp/
- 在宅就業支援の利用者：15名（うち重度障害者14名）
（内訳）身体障害者……………14名
 その他……………1名

平成10年より重度障害者の在宅就業支援を開始した特定非営利活動法人。重度障害者が社会経済活動に参画し、活躍できることを目標に「ITを活用した在宅就業」支援事業を行っている。同工房に応募し、選考された人は「在宅ワーカー」として登録され、WEBページの制作やソフトウェアの開発など、自分のスキルを生かした業務を行っている。平成18年5月に在宅就業支援団体に登録。

企業 サンメッセ株式会社 マルチメディア部 (サンメッセ情報館)

- 所在地：岐阜県大垣市加賀野 4-1-19
- ☎ 0584(75)6811 FAX 0584(75)6813
- URL：http://www.sunmesse.co.jp/
- 業種：印刷業
- 事業内容：デジタルコンテンツ（WEB、DVD等）制作、システム開発

従業員数（本社）	720人（平成20年3月期）
うち在宅雇用者数	……………1名
うち障害者の在宅雇用者数	……………1名

マルチメディア部はデジタルコンテンツ制作、システム開発を中心としており、スキルの高いプログラマーを募集していた。障害のある方の在宅雇用については前例がないため、社内に担当責任者を配置し、メール等の利用により勤務時間外での連絡も取れるように工夫している。

在宅雇用者 末永 慎一さん

- 居住地：岐阜県在住
- 障害種別：身体障害（1級）
- 障害状況：脳性まひ。車椅子を補助具として使用。自立度が高く、食事の介助のみ家族が行っている。仕事上の介助は不要。

養護学校においてパソコンをベーシックより習得し、パソコン通信による情報収集やコミュニケーション手段としての利用もいち早く確立していた。パソコン歴は長く、タイプライターやワープロを含め30年のキャリアを持つ。前職ではプログラマーとして14年間の在宅雇用の経験があり、現在の仕事も必要に応じて出社、打ち合わせ等にも参加している。

■特定非営利活動法人
バーチャルメディア工房ぎふ

■サンメッセ株式会社
マルチメディア部

■在宅雇用者 末永優一さん/まとも

支援団体

特定非営利活動法人
バーチャルメディア工房ぎふ

支援内容紹介

IT人材養成の拠点の一つとして、各団体との連携を強化。パソコンを中心とした業務の指導や資質向上のための研修を実施。



理事長
上村 敦洋さん

在宅雇用を広めるために積極的に研修を展開

「末永さんとは20年来のお付き合いで、初めて会ったのは彼が養護学校高等部の頃（昭和61年）にさかのぼります。当時「情報化社会と私」という題材で論文募集があって、同じ表彰台に立ったのがきっかけです」とバーチャルメディア工房ぎふの上村敦洋理事長。以来、進学や就職、ご家族の話など、BBSやメールを利用した交流が今も続いており、末永さんが日頃感じていることを気軽に話せる間柄になっています。

バーチャルメディア工房ぎふは、中部圏の一大IT拠点であるソフトピアジャパンに平成10年に設立。ITを活用した重度障害者の在宅就業を行う団体として、WEBサイトの構築、各種印刷物制作、ソフトウェア開発、ネットワーク構築などの仕事に加え、IT関連の人材育成・研修にも力を注いでいます。「私たちは福祉用具等の共同開発にも



▲依頼を受けて製作したキーボード入力用のプロテクトカバー。丸い穴が付いており、誤入力を防ぎます。

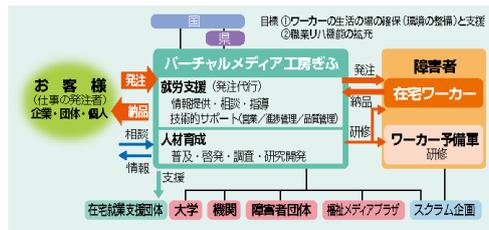
参加しています。末永さんからはキーボード入力用のプロテクトカバーの依頼があり、ボランティア団体を通じて製作しました」と上村理事長。平成12年から始まった身体障害者の情報処理機器等を活用した在宅就業支援モデル事業では、すでに在宅雇用者としてキャリアのある末永さんを講師として招き、障害のある方が仕事とどう向き合うべきかについて自身の経験を踏まえて受講者に話してもらいました。

地の利を活かした交流と連携。在宅雇用の創出に向けて活動

バーチャルメディア工房ぎふは、登録された在宅ワーカーの就業支援を行うとともに、IT関連の企業・団体・個人との結びつきを数多く持っています。末永さんが14年間勤めたソフトピアを退社し、再就職の相談に来たときも、これまでの経歴を十分に把握できていたため、請負でデータ入力の仕事（3カ月間）を依頼することができました。

時期を同じくして、ソフトピアジャパン内にマルチメディア事業部を有するサンメッセ株式会社から、障害者雇用の相談を受けました。そこで、高いスキルを持つ末永さんを推薦することに。採用後は、同じ敷地にあるという地の利を活かし、企業との定期的な交流、意見交換を通じ、継続雇用をフォローしています。

◆取り組みイメージ



▲2カ月に一度開かれる在宅ワーカーのミーティング。仲間同士の情報交換も盛んに行われています。



岐阜県大垣市にあるソフトピアジャパン。人材育成、産業高度化などを主な機能として約140社が活動しています。



岐阜県立国際たくみアカデミー職業能力開発校の委託を受けて実施している「職業能力訓練」の様子（3カ月間）。



視覚障害、身体障害があっても入力しやすいキーボード。他にも障害者に合わせた道具の開発、改良を行っています。

企業

サンメッセ株式会社
マルチメディア部

支援をうけて

メールと電子日報を活用して、
在宅雇用でも毎日の業務進捗を上手に管理。
長期のプログラム開発の貴重な戦力に。



マルチメディア部 ソリューション係
係長
服部 光伸さん

Work contents

末永さんの業務内容

- サンメッセ株式会社のマルチメディア部に配属。
- 企業より受注を受けたシステム関係のプログラム開発に従事し、比較的規模が大きく、開発に時間を要するような業務に関わっている。

本人のプログラムスキルを最大限に活かせる部署に配属。業務の進捗はメールで

当社が求めていた人材は、システム開発に関する高いスキルをもったプログラマーです。そこで、岐阜県のIT拠点ソフトピアジャパン内に事務所があるバーチャルメディア工房ぎふに打診し、即戦力として職場に投入できる人材を推薦してもらいました。当初は通勤が条件でしたが、末永さんの資質と業務内容から在宅雇用でも問題ないと判断、末永さんに依頼するプログラムは開発スパンが1年以上かかるような大きな仕事を依頼しています。採用時、末永さんはすでに14年間のプログラマーとしてのキャリアがあり、システム開発に関する教育や研修などは特に行っていません。

当社では在宅雇用の前例がないため、担当責任者を置き、業務の進捗や相談などの窓口としました。担当責任者と末永さんとのメールのやり

りとりは1日4～5件程度。業務時間外でも連絡が取れるようにしています。また、急ぎの調整が必要な時は、末永さんがパソコンごと当社に運び込んで作業することもあります。



▲来社による打ち合わせは月に一度（新規案件に入るときは臨時で打ち合わせ）。担当責任者の服部係長と末永さんとのメールのやりとりはこれまで4,300通近くにのびります。

電子日報を活用して業務時間、仕事の問題点を共有・把握

毎日の業務管理は、末永さん自身も開発に携わった「電子日報」というソフトを利用しています。終業時にこのソフトに入力してもらうことで、勤務時間集計や原価管理をはじめ、仕事の問題点などを担当責任者と末永さんがお互いに把握することができます。

在宅雇用を始めて5年が経過。身体に障害があるから仕事が遅いといった不都合は現在のところ一切なく、当社の予想を上回るスピードで成果品が上がっています。今後は担当責任者だけではなく、他部署の人ともコミュニケーションを図り、業務に幅を持たせる予定です。また、時間的なロスが出ないように的確なタイミングで末永さんに指示を出し、ワークフローをさらに強化していきます。



▲電子日報の入力フォーム（社員が毎日入力）。どの仕事にどれだけの時間がかかったが一目で分かります。

末永さんの雇用状況

雇用形態	パート社員
勤務時間	7時間40分/日(38.3時間/週) ※残業は、5時から5時30分の間にメールにて許可を取る。
賃金	時間給
福利厚生	社会保険有・健康診断1回/年
設置機器	開発用パソコン2台
購入、設置費用	約60万円（通信用ソフト含・通信費用は個人払い）
メンテナンス	会社負担
消耗品の購入	必要に応じて会社で支給
雇用にあたり活用した制度	なし

■特定非営利活動法人
バーチャルメディア工房きふ

■サンメッセ株式会社
マルチメディア部

■在宅雇用者 末永慎一さん/まとめ

在宅雇用者 Interview

マルチメディア部ソリューション係
末永 慎一さん



一番大切なことは「自分がなぜ働きたいのか」ということ。プログラマーとして会社にもっと貢献していきたいと考えています。

途中でブランクがあったものの、在宅雇用として勤務して約18年になります。若い頃は自分で稼いだお金で楽しみたいと思っていたのですが、今では家族のためにと目的が変わっています。変わらないのは障害に関係なく「働いて当然」ということでしょうか。在宅雇用で採用してくれたサンメッセ株式会社に巡り会えたことに、本当に感謝しています。仕事環境もパソコンのハード、開発言語ソフトなど最新の設備を揃えていただきました。常に新しいスキルを

身につける必要はありますが、開発者にとって新しいものにトライできるのは嬉しい限りです。今後は、会社にもっと貢献できるように他部署にも自分のスキルをアピールしていきたいと考えています。

在宅雇用で求職している人は「なぜ働きたいのか」という意志を明確に示すこと。そして体調を崩さないための自己管理をしっかりと考えて就職に臨むことが大切だと思います。

支援関係早見表

関係者	サンメッセ株式会社 マルチメディア部	特定非営利活動法人 バーチャルメディア工房きふ	末永さん
就職・雇用ニーズ	・新規事業部の立ち上げに伴い、システム開発のプログラムができる人材を求めている		・ソフト会社にプログラマーとして14年間在籍（在宅雇用）。退職後、そのスキルを活かした仕事を探していた
就職前	トレーニング期	相談 ・プロテクトカバー製作 ・3カ月間の請負を紹介 相談 ・末永さんの経歴、実績などの情報を提供	相談 ・再就職を希望 ・ホームページを活用して自分のスキルを売り込み
	就職準備期	面接 ・末永さんの実績から在宅雇用導入を決定	面接
採用決定			
就職後	初期段階	環境整備 ・システム開発用PC、資料の購入 進捗管理 ・来社による打ち合わせ ・メール、電子日報による確認	システム開発 ・電子日報の開発 ・成果物をサーバーにアップ
	現在	継続雇用 ・開発スパンの長いシステム開発業務を依頼 ・短期間のシステム開発を部分的に依頼	フォローアップ ・人事担当者へアンケートの実施 ・地の利を活かした密な交流 継続雇用 ・5年勤務 ・職務の幅が広がり、意欲的に仕事をこなしている

まとめ

この事例におけるポイントと評価
末永さん自身のスキルの高さと在宅雇用の実績に加え、「働く意志」を外に向けPRし続けてきたことが再就職を成功させた一番のポイント。支援団体が末永さんの資質を以前より十分に把握していたことで、企業側の求める人材を推薦することができた。企業としては障害のある方の在宅雇用は初めてだったものの、担当責任者を配置、電子日報を活用するなどして、業務における連携は良好である。なお、今回の雇用事例を企業が啓発セミナーや広報などの場で何度か紹介し、県内外企業からの注目度も高い。

今後の目標
開発スパンの長いシステム開発業務は、在宅雇用という就業スタイルに向いているが、一方で、細やかな仕事を頻繁に依頼したとき、小さいエラーが発生したときに軌道修正がしにくいなどの課題を抱えている。メールだけでは詳細な内容を伝えることに限界があるため、今後は担当責任者だけではなく、他の社員とも直接打ち合わせを行い、コミュニケーションできる機会を増やしていく構えである。

Ⅱ

障害者の在宅就業を活用した 新たな職域に関する調査

4. 岐阜県における「働く」障害者の好事例

(2) 在宅就業支援団体の登録ワーカーより就労した事例

<企業へ就職のケース>

働くまでの道のり

Man to Man G Animo.com (株)

林 映二

<岐阜県大垣市>

脳性麻痺 (障害者手帳 1 級)

就職して5年目になります。私は現在、Web 関係のエンジニアとして働いています。私がこうして働くようになるには、いろいろな壁があったように思います。その1つ1つの壁について、自分なりに考え、それを実行してきました。また多くの人達に出会い、支えていただきました。時々、もし壁がなかったら (普通に就職していたら)、こんなに「働くこと」に価値があるとは思わなかっただろうなと思います。少し複雑な思いはしますが、今はこちらの道で良かったと考えています。

私の「働くこと」への道のりは、高校卒業後、国立吉備高原職業訓練リハビリセンターからスタートします。そして、初めて社会の厳しさを知ったような気がします。訓練そのものは、順調に進んでいましたが、やはり就職活動が思うようにはいきませんでした。当時はバブルがはじけ、超就職氷河期と呼ばれていました。そのような中でも、一緒に訓練を受けていた仲間の中には、面接や内定をもらう人もいて、面接の機会すらない私は、かなり落ち込みました。景気や障害を、その原因にしたいはなかったし、それより自分なりに自分の可能性を信じていたように思います。

訓練センター終了後も、2～3年の間は、ハローワークに通い続けていましたが、どんなに職安に通いつめても、面接の機会もありませんでした。

そんなある日、ハローワークの担当者と企業との面接の交渉のやり取りを聞いていました。ハローワークの担当者が「難しい」、「できない」という言葉を頻繁に使っているのに気づきました。「面接だけでもしてもらえれば・・・」という思いがありましたが、同時に、初めて自分がコンピュータを使った仕事しかできないことに気づきました。

電話の対応やコピーなどできるわけではなく、企業が私を雇う理由を考えると、自分のことながらわかりませんでした。それでも、自分にはコンピュータを使用した仕事しかないと考え、コンピュータのスキルを高めることを意識するようになりました。

当時は、家にいることが多く、なかなか社会と接点が持てませんでした。そんな状況のなか地元の知人から「福祉メディアステーション」を紹介されました。ここでの出会いは新鮮で、社会との接点が少なかった私には、とてもいい刺激になりました。

その後、「バーチャルメディア工房ぎふ」にも参加することもでき、初めて働くことができるようになりました。それまでは、働きたくても、「働く」ってどんな感じだろうという疑問を何時も持っていました。

実体験を通し、もっと様々なことを向上させなければと、働くことの課題がより具体的にみ

えてきたように思います。そして何よりも「働く＝就職」と決めつけてきた私にとっては、在宅就労は新鮮な驚きで、「働くスタイルはいろいろあっていいんだな・・・」と、肩の荷がおりたような気持ちでした。

就職へのきっかけも、「バーチャルメディア工房ぎふ」からでした。工房では、気が合う人たちばかりで心地よい環境だったので、就職の話が来たときは正直迷いました。しかし、私は、これまで養護学校育ちで一般の社会を知らないし、一度はチャレンジするべきだと考え、今の会社に入社することにしました。



現在では、業務の進捗管理や他の社員に技術的なアドバイス・指導などもやっています。まだまだ満足 of いく仕事ができず、日々勉強だなと感じています。

また会社では身体障害の他、精神障害の方もいて、自分の障害についても客観的に捉えるいい機会となっています。

私は、働くことによって、工房のスタッフをはじめ沢山の人達と出会うことが出来ました。中でも、工房の指導と支援によって運転免許証を取得したり、前々からの「夢」の一つでもあった親元を離れての一人暮らしも実現させることが出来ました。そうしたお陰で、何よりも自分が大きく成長できたと感じています。

いろいろな壁などもありましたが、ふり返ってみれば、それもいい経験だったかなと思えてきます。

あの頃の課題はクリア出来ているかもしれませんが、今は今の新しい課題があります。その課題を1つずつクリアして、自分をより成長させていきたいと思っています。

<企業へ就職のケース>

在宅就業との関わりについて

株式会社 臼田工業

服部 和弘

<岐阜県岐阜市>

頸髄損傷による四肢麻痺（障害者手帳1級）

19歳の時、不慮の事故により頸椎損傷という障害を負ってしまいました。当時僕は、建築家を目指し4年制大学に通う一年生でした。

医師に、これから先一生歩けないと告げられ、建築家になる夢を諦めた僕は、少しでも自立に近づけられるよう、入院生活のなかりハビリに励んでいました。

症状も固定し、ある程度の日常生活をおくれるようになり退院し、実家に戻ることになりました。

入院中は、とにかくリハビリに専念していたため、仕事のことは考えていませんでしたが、家に戻ってからは、次のステップとしてなにか自分に出来る仕事はないだろうかと模索していました。



知人から在宅の就業支援を行っている「特定非営利活動法人バーチャルメディア工房ぎふ」を紹介され、相談に行きました。そこで僕は初めて在宅就業のことを聞き、これなら多少体に不自由があっても、パソコンがあれば立派に働くことができるんだと思いました。当時、パソコンの操作すら分らないまったくの初心者だったので、まず基本的な操作や、word・excelなどを講習会に行ったり、自主学習したりして、スキルアップするところから始めました。それからしばらくして、「バーチャルメディア工房ぎふ」の在宅就業登録ワーカーとして仕事させてもらうことになりました。

在宅就業の良いところは、自分が生活しやすいベストな環境である我家が、職場であるということです。生活しやすいということは、同時に仕事もしやすいということです。

具体的にいうと、車椅子でも使えるトイレがあること、通勤時間がいないこと、冷暖房機器があり自分に適した室温で仕事ができること、外へ出ていく準備が必要最低限で済むことなどがあげられます。今の時代、冷暖房機器がないところはほとんどないと思いますが、体温調整にも障害がある頸椎損傷者は他の方と感じかたが異なり暑すぎたり寒すぎたりして、それによって体調を崩してしまうこともあります。

それから、外へ出ていく準備とは、社会人として職場に行く場合には、それなりに正装していかなければなりません。着替えるのに人の何倍もかかったり、手に障害がある人は、ワイシャツのボタンやネクタイなどにすごく時間がかかったり、できない場合もあります。だから

とって寝巻のままが良いということではなく、時間と着替えとに折り合いをつけ、自分に適した服装で仕事に臨めるということです。

こういったことは障害に起因することですが、表には非常に出にくい問題だと思います。なので、一般的には理解されず、障害当事者のただのわがままだと思われてしまっているかもしれません。雇う側と雇われる側のお互いの十分な理解が必要不可欠だと思います。

それから一つ問題になるのは、コミュニケーションのことですが、メールや電話、Webカメラなどを活用し、いつでも連絡を取り合うことのできるネットワーク環境があれば解決できると問題だと思います。健常者と同じようにベストなパフォーマンスを発揮するために、働きやすい環境であるというのは非常に大切なことだと思います。

現在、僕は一般企業で仕事をしています。「バーチャルメディア工房ぎふ」の在宅ワーカーとして得た知識と後押しをいただき、昨年の12月から正社員として働いています。労働形態は在宅勤務ではなく、会社に通勤し、フルタイムで勤務しています。当初、在宅も含めた形での勤務を希望していましたが、この会社ではそういった形態をとっておらず、システムも確立していないとのことでした。今まで会社勤めの経験もなく、さらに平日フルタイムでの勤務が体力的にもどうなのかと、不安に思うことはありましたが、今の自分がどこまでやれるのか、そして新しい環境でチャレンジしてみたいという気持ちが強かったので、ここで頑張ってみようと思いました。会社としても、「まずは自分の体を第一に考えて、これから続けていく中でどうしても体力の限界を感じたときは、遠慮なくすぐに伝えてほしい」と、配慮をしてもらっています。

障害者(特に車椅子使用者)が一般の企業に就職する場合にまず第一の壁になってくるのが、会社自体がバリアフリーに対応しているかどうかというところだと思います。幸い、僕の勤めている会社は、全面的ではないものの、一部は車椅子で行き来できるようバリアフリーになっていました。将来的には全面バリアフリーに対応させるよう、順次進めていただける予定になっています。

在宅勤務と会社通いの勤務の違いは、やはり環境の差が大きなポイントだと思います。在宅では仕事場が自宅なので、どうしても気持ちが緩みがちです。また、ある程度時間に融通がきくところはいいところですが、計画的に仕事を進めていくことが重要になってきます。

一方、会社通いの場合は、周りに社員さんもいますし、適度な緊張感のなかで仕事ができます。仕事とそれ以外の時間がはっきり分かれているので、気持ちの切り替えもしやすいです。あと、現場でしか学べないこともあったりします。

就職して約3カ月ほど経ちましたが、今のところ大きなトラブルもなく順調にやっています。仕事がある日は、夜早く寝るようにもなりましたし、体調管理には十分注意して、以前より規律のある生活が送れています。

まずは一般企業に就職するという目標が達成できたので、これからは新たな目標を決め、更に個人スキルを磨いて、会社にとって居なくてはならないような人材になっていけるよう、日々努力していきたいと思っています。自分には障害があるからと壁を作ってしまうと、どんどん前向きに挑戦していきたいです。そして、障害があっても働ける環境があれば十分にやっつけられるということを、社会的に認めてもらえるように、頑張っていきたいです。

<独立のケース>

生きる支え、働くこと

スクラム企画 代表

一本木 一裕 (50歳)

<岐阜県高山市>

頸髄損傷による四肢麻痺 (障害者手帳1級)

障害を負ったのは1989年、29歳の時でした。入院中、指一本でも仕事につながるのではとノートパソコンを始めたのが、パソコンとの出会いでした。当時、職場にもようやくパソコンが普及しはじめたばかりで、ノートパソコンもモノクロでしたが高価なものでした。

退院後、車椅子の身体では復職できず、仕事を失いました。社会から放り出されたやりきれなさがありました。けれど、できることをやるしかない、入院中より覚えたパソコンでというより、当初はワープロソフトの一太郎ぐらいしかできませんでしたが、我流でやっていました。

そんななか、私を心配してくれる友人達が、会報誌などの版下作成の仕事を持ってきてくれるようになりました。ワープロ専用機よりは、パソコンでの版下作成の方が自由度が効き重宝がられ、人の役に立てることの自己満足感と、自身のやりがいにつながっていきました。こういったことが仕事に結び付いていったことは、早くからパソコンを始めて良かったと思っています。

パソコンをやり始めた頃は、ノートパソコンからIBMのDOSのデスクトップパソコンでDTPに取り組んでいましたが、いろいろ仕事をしていくなかで関係者もそうでしたが、DTPをやるならマッキントッシュが主流とのことで、また思い切ってパソコンを買い替えました。

マッキントッシュで仕事をするようになると、これまで印刷所への入稿は紙版下ばかりだったものがデータで入稿出来るようになり、さらに実際の現場に近づいてきたといった実感が持てたとともに、やりとりをすることで社会の仕組みの中に関わっているという自信にもなっていきました。

こうして、在宅でDTPの仕事が続けることは出来ましたが、仕事は単発にしかないのが現状でした。できれば企業に就職して、安定した収入が得られればありがたいのですが、この時年齢がもう40歳近くで、車椅子の障害者を受け入れてくれる企業もないだろうとあきらめていました。通勤のことを考えてもしかりです。社会人としては当たり前ですが、体調管理は障害者には配慮がほしいところもあり、そんな甘えも聞いてもらえることも申し訳なく、就職も厳しいと考えていました。

そんな中、「バーチャルメディア工房ぎふ」のワーカー募集がありました。重度障害者の在宅就業を支援するNPO法人です。技術研修や業務管理といったことまで幅広く、在宅でインターネットを使って実際に仕事をいただきながら就業を支援するところです。私は幸い第1期のワーカーに採用され、さらに技術の向上を目指しました。工房に就職したということではなく、

あくまでも支援機関ということであり、毎月給与が支給されるわけではありません。それでも、いただいた仕事の報酬はあり、在宅での仕事の収入も少し増えました。

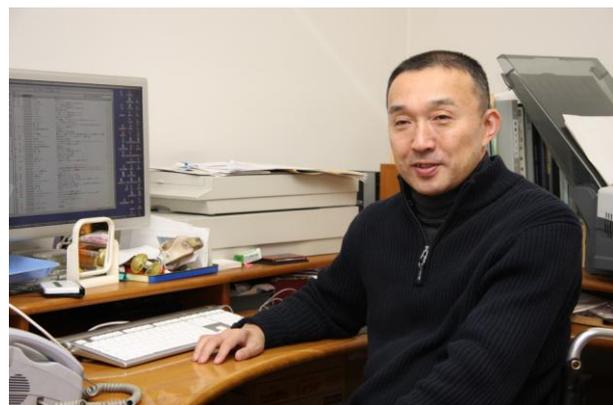
障害者にとってのテレワーク、在宅就業という就業形態は、通勤といった問題、介護・介助・体調管理といった問題においてとても大きな利点があります。障害者のみならず、障害者を介護している人や育児中の人など、インターネットや情報通信機器の活用で、テレワークは柔軟な就業形態を作りだしています。この就業形態を多く企業・会社で取り入れてくれたらと願うばかりです。しかし、企業・会社の理解ある取り組みに期待するばかりでなく、国がテレワークに関する施策を法的に整備して、テレワーク導入をし易い環境を作ることも同時に進めてほしいと願います。

障害者の側も、雇用という形態で在宅就業に応えられるように、スキルアップする必要があります。しかし重度の障害者が専門の技術を身につけることは容易ではありません。専門の学校へ通うにしても、介助が必要な障害者には大変です。独学するしかありません。独学だけでは実際の現場での経験が持てないために、即戦力とはなかなかいきません。

そういった障害者には、「バーチャルメディア工房ぎふ」が行っているe-ラーニングのように、在宅でも学べるIT技能や専門技術の習得が有効ではないでしょうか。また、仕事の現場を知る人が実際に障害者の自宅まで訪ね、技術指導や仕事の現状や業界の状況など説明するなどのこともあったらいいのではないのでしょうか。このようなことを障害者福祉の1つとして組み入れてもいいかとも思います。

障害を負った当時、結婚なんてことを考えてもいませんでしたが、「バーチャルメディア工房ぎふ」でワーカーとして仕事が少しずつ増え、少し希望が見えたことで結婚をすることができました。その翌年には子どももでき、生活のためにより仕事を頑張らなくてはならなくなりましたが、ただでさえ景気が厳しい中では、仕事の量は増えはしませんでした。

そんななか、地元で空き店舗対策と起業家支援などの目的で、店舗入居の募集がありました。思い切って応募し、選考の上入店が決まりました。仕事は、在宅での延長のような仕事で、パソコンを使ってのDTPやデジタルプリントといった内容です。これまでの在宅でのお客様のつながりや、商店街・地域の方がお客様です。在宅就業とは違う、お客様と直接対面しての個人の自営業になります。「バーチャルメディア工房ぎふ」で習得した知識を生かし頑張っていますが、未だ経費を稼ぐのが精一杯です。けれど地域社会のちっちゃな歯車として、社会の中に関わり、地域の中でごく普通に障害者が働いている姿を見てもらっているという充実感があります。



在宅就業という形態が確立され、重度の障害者が在宅でも働くことができれば、社会とのつながりと新たな役割を見いだせるのではないのでしょうか。